

介護等体験を終えて

—支援を必要とする人と接して—

小湊加奈子（人文学部日本伝統文化学科2年）

（1）特別養護老人ホームでの体験

私が体験に行った施設は、いわゆる「老人ホーム」と呼ばれるところでした。普段から高齢の方とあまり接していない上に、高齢者への知識が十分でないまま体験に行ったため、初日は利用者さんに話しかけることが出来ないまま一日が終わってしまいました。

しかし、職員の方から言われた「傾聴」を心がけてからは、利用者さんの方から話しかけてくれることが多くなり、コミュニケーションを取る機会がかなり増えました。

また、利用者さんの話していたことは積極的に覚え、別の利用者さんと話すときの話題として取り上げることで、2人の会話から3人、4人への会話に繋がり、場が明るくなることにも気が付きました。

このようにして、高齢者の方とのコミュニケーションの取り方にも慣れてきたころ、車いすに乗った利用者さんとこんなやり取りがありました。

その利用者さんがお手洗いへ向かおうとしていることに気が付き、私は車いすを押して移動の補助をしようと思いました。するとすぐに「いいのよ、押さなくて」と断られ、「普段から動いてないからこのくらいは自分で動かないとね」と言われてしまいました。

この言葉にかなり衝撃を受けました。私が考えていた、何でもこちらがやってあげるというサポートのしかたが自己満足に近いことに気が付いたからです。

（2）特別支援学校での体験

特別養護老人ホームの時と同じようなやり取りは、特別支援学校の体験でもありました。

子どもたちを車いすに乗せて移動する際には必ず靴を履かせなければならないのですが、自分で履くのは難しいのではと思い、こちらで履かせてしまいました。しかしその子は靴を履くことのすべてが出来ないわけではなく、テープを止めることなら出来るにもかかわらず、特別養護老人ホームの時と同様、行き過ぎたサポートをしてしまいました。

（3）両施設での体験を通して

どちらの施設の体験でも、行き過ぎたサポートをしてしまうことがありました。同じ「支援を必要とする人」でもその人によってどこまでこちらがサポートすべきなのかがだいぶ違うところに難しさを感じました。